
学園生活

壬生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園生活

【Nコード】

N5404G

【作者名】

壬生

【あらすじ】

日本の某県にある青龍高校に入学し、主人公がさまざまな人たちとかかわり合う、学園生活のお話です。【更新を止めたいと思います。更新は必ずいつかします。それまでご迷惑ですが、よろしく願います】

FILE 0：プロローグ（前書き）

（＊注意、魔法学校という作品があり、登場人物などの名前が同じですが、時系列は違い、場所も違います。ただ名前が同じでキャラクターの性格も同じというだけです）

FILE 0：プロローグ

俺の名前は、瀬戸^{せと} 凌^{りょう}

季節は、春。

俺は今、真新しい制服に身を包み、青龍^{せいりゅう}高校に向かっていた。

俺の周りには、俺と同じ校章が入った制服を身にまとった人たちがいた。

俺は、期待も不安もあった。

周りの人の顔を見ると、みんな似たような面持ちだ。

「ううー、今日は入学式と対面式か……緊張するな……」

それに、今日から知らないやつらばかりだから緊張するな……

ー

俺は、いろいろと考えていると、いつの間にやら青龍高校の門に立っていた。

見るからに、広そうな学校である。

俺は驚いていたが、気を取り直して、中庭に向かう。

中庭にはクラスが張り出されているからだ。

ちなみに、中庭のクラスが張り出されている場所は、校門から歩

いて5分くらいだった。

俺はクラスが張り出されている場所に来ると自分のクラスを探し始める。

「え〜とと 瀬戸。 瀬戸はつと・・・ あった。あった。Cクラスか。」

出席番号は16番か、知り合い誰がいるかな？・・・お！何人かいるみたいだな。よかった知らないやつばかりじゃなくて・・・」

俺は、入学式があるため、体育館に向かう。

体育館はここから、少し歩かないといけないみたいだ。

俺は近くにある、案内板に従って体育館に向かった。

まず、俺が体育館について思ったことは、これは広すぎる、と思った。

普通に野球ができる広さである。

俺の周りにも、入ってみて、凄すぎて驚いて入り口にたたずんでいる人もいる。

俺は、体育館に入って驚いたが、少しするとそれもだんだんと薄れてきた。

俺は自分のクラスで自分の番号を探して、椅子に座る。

俺が座る時には、もう座っている人が結構いた。周りではどんどん椅子が埋まっていく。

俺は、しばらく待っていると、教師らしき人たちが喋っている生徒に注意し始める。

そして、静かになると、

「これより、青龍高校入学式をはじめます」

どこからか聞こえる声があった

そして、俺の入学式は始まった。

長々と校長、PTA会長の話始まった。

初めの内は話を聞いていたが段々と催眠術のように、眠気が襲ってきた。

俺は、寝まいと、がんばっていた。

しかし、段々とまぶたが落ちていき、俺は意識が途切れた。

目が覚めると入学式は、終盤に差し掛かっていた。

しばらくすると、

「以上で青龍高校入学式を終わります」

入学式が終わった。

次は対面式が行われる予定だ。

良くはわからないが、上級生との顔合わせみたいだ。

スツとステージ脇から、上級生らしき女子生徒が現れ、

マイクを持っていないのに、新入生すべてに聞こえる声だった。
その声が高らかに言い放った。

「これより～～！！ 対面式を始める」

FILE 1

「これより 対面式を始めます！」

ざわざわしていた人たちが、ステージに立った上級生らしき女子生徒の声で、一斉に、静かになった。

俺は、声のしたステージに視線を向けた。

そこには、青龍高校の制服を着ている、女子生徒が立っていた。

聞くところによると、青龍高校の生徒会長の黒木 慶くろき けいと言う先輩だった。

聞いた話では、黒木先輩は、頭脳明晰でさまざまな活動に貢献して、その

おかげで青龍高校を盛り上げたらしい。その影響でか一般生徒達や先生からの評価もたかいらしい。

黒木先輩の容姿はかなり整っている。髪はストリートに下ろしていて黒くしかし艶やかに腰までの長さがある。そして人柄もよさも支持される理由の一つだと言う。

「まず、皆さんが使っているパイプ椅子を片付けます」

俺たちは出てきた黒木先輩に、見とれていた。

「1年生は、立ってください。椅子には荷物を置かないでください」

俺たちは、黒木先輩の指示で皆立ち上がった。

「1年生は、自分が使った、椅子を横の棚に入れてください」

俺たちは、黒木先輩の指示通りに、椅子を片付け始めた。

俺たちの片づけが終わると、

「ではこれから、対面式を始めたいと思います。まずは2、3年に入ってもらってから1年は私から見、右側に寄ってください。」

黒木先輩が、そう言う、2、3年が入ってくる。

2、3年は入ってくると、皆が興奮した顔をしていた。

2、3年はすぐに自分たちの場所に行って、静かにまっていた。

「まず、今から渡すものを見てください」

黒木先輩がそういうと、生徒会役員らしき人たちが、先頭の生徒に紙を渡していた。

「みんな、それを取って、見てもらえる？それに書いてあるのは、こちらで決めたグループです、とにかく、グループで会って自己紹介をしてください。続きはその後ですから、それじゃ、始めてください」

俺は、しばらく呆けていた。そして、黒木先輩の指示通り動き始める。

FILE 2

俺は、紙に書いてあった場所に向かった。

俺が、ステージ前に行くともう10人位いた。

「遅れてすみません」

俺が、謝ると1人が「気にしないでいいよ」といつてくれたので、気にしないことにした。

そして俺が来たあとに2人きて、すでにここにいた1人が「よしそろったね」と言った。

「えっとじゃあまずは俺の自己紹介だね。俺は徳川啓介とくがわけいすけです。学年は3年でクラスはAです。まあこのグループのまとめ役を任されることになってます。って
ことでよろしく」

徳川先輩は少し長めの髪をした、爽やかな感じだ。

徳川先輩の自己紹介が終わり、徳川先輩の隣にいる人が、自己紹介をしはじめた。

「俺は 織田おだ 慎しんです。よろしく！学年、クラスは啓介、いや徳川とおなじです。じゃ俺は終わり」

織田先輩は見た目は、かっこいい人だ。織田先輩はメガネをかけて

いて、髪も短めで、知的なイメージだ。

「次は浅海 お前だ」

徳川先輩が女生徒を1人呼んだ。

「天持^{てんもち} 浅海^{あさみ}で〜す。 よろしく〜！ 3年でクラスはBで〜す。
じ

やあ次、いってみよ〜」

元気いっぱいの声が聞こえる。

天持先輩は元気っ子タイプだ。髪は短くショートカットだ、それでいてかわいいと言える笑顔だ。

「美雨 どぞ！」

天持先輩の声で隣の人が反応した。

「小林^{こばやし} 美雨^{みづ}と言います。 学年は3年ですクラスはBです。 よろしくお願ひします」

小林先輩は上品な感じだ。髪はおしとやかでまさしく大和撫子と言ったほうがしっくりくる人だ。しかもソプラノボイスが心地よい。

「つぎは、上杉君やってくれ」

「わかった」

徳川先輩に反応したのは徳川先輩の隣にいる人だった。織田先輩と

は逆の隣にいた。

「俺は、上杉 剣^{うえすぎ けん}だ。 2 - Eだ。 よろしく」

上杉先輩はクールな人みたいだ。

上杉先輩が簡潔に自己紹介すると、

「武田 聡史^{たけだ さとし}です。 2 - Dです。 よろしくお願いします」

と武田先輩が自己紹介した。

武田先輩はガタイが良くプロレスラーみたいだ。

「椎名 真奈美^{しいな まなみ} 2 - D」

今度は椎名先輩が自己紹介した。

椎名先輩は、すごい無表情だった。 椎名先輩はかわいいより美人に入る容姿だ。

「次、おねがい」

徳川先輩が言うと、 1人が前にでてきた。

「岡本 美咲^{おかもと みさき}といいます。 よろしく。 2 - Cです。」

岡本先輩は背が高い170cmあるのでないかという身長をしていた。 しかもクールという感じで、別に、変な感じはしなかった。

「次」

「はい。私は冬月^{ふゆつき} 恵美^{めぐみ}といいます。1年E組です。よろしく！」

冬月さんは元気っ子的なタイプだ。なぜか天持先輩と似ている気がする……

終わると俺が1歩前に入る。

「俺は、瀬戸です。瀬戸 凌^{りょう}です。よろしくお願いします。1 - Cです」

俺は終わるとともに1歩下がった。

すると隣にいる男子が1歩前に入る。

「はい！俺は、犬塚^{いぬづか} 佐助^{さすけ}です。ヨロシクッス！あと、1 - Cです」

犬塚は見た目はカッコイイのだ。中身は知らんが……

犬塚、俺と同じクラスか……仲良くしないとな。いい話し相手になると思うからな。……

犬塚が1歩下がると男子の最後の1人がゆっくり1歩前に出た。

「僕は、石川^{いしかわ} 将^{しょう}です。よ、よ、よろひいくおねがいましたしゅ！1 - Aでしゅ！、です！」

石川は自己紹介で嘸みまくった。周りの人はクスクスと笑っていた。

それを見て石川は真っ赤になりうつむいていた。

どうやらあまり人前でしゃべれないみたいだ。

石川はカッコイイって言うよりかわいって感じた。 実際見た目も男って言うより女に見える。

石川は終わるとすぐに1歩下がった。

それを見ていた最後の女子が1歩前に出てきた。

「私は、^{わたくし}朝比奈^{あさひな} 桜^{さくら}と申します。 新入生でC組です。 どうぞ、よろしくお願いしますね」

同じクラスに美人さんか・・・／／／／／

これで今ここにいるのは終わったのだが、人数を数えると13人しかいなかった・・・

確か、生徒会長の黒木先輩は、14人か、15人と、言っていたから

誰か休んでいるのかと思ったが違ふみたいだ。 徳川先輩が誰かを探しているみたいだからだ。

「あっ！！ こっちや！！こっち！！ここ！！」

と徳川先輩が叫んだ。

先輩が叫んだほうを見ると生徒会長の黒木 慶先輩がこっちに来る。

そして黒木先輩が俺がいるグループまで来た。

「すまない。遅れたよ」

黒木先輩は来ると俺たちに謝った。

「いや、気にするな！ 生徒会の仕事だったんだしな」

「しかし……」

「とりあえず 自己紹介頼むわ」

徳川先輩は笑って話を変えた。黒木先輩は納得がいかないような顔をしたがすぐにふつうに戻った。そして話し始めた。

「私は知つてのとおり生徒会長を務めている、黒木 慶だ よろしく頼む、3-Cだ」

はじめにも言つたとおり黒木先輩は美人だった。周りにいるほかのグループの人も見とれている。俺もその一人だ。

「これでいいな よしあとはほかが終わるのを待つだけだな」

「ああ それじゃ 私は向こうに行つて来る」

「ああ こっちは任せろ」

黒木先輩が徳川先輩に断りを入れてステージ横に向かった。

FILE 3

黒木先輩が徳川先輩に断りを入れてステージ横に向かった。

ステージ脇に行く黒木先輩。

俺は、黒木先輩を目で追っかけていると隣にいた犬塚がしゃべり掛けてきた。

「なあなあ、確かあんた、瀬戸だったよな？」

俺はうなずく、

「そういう、あんたは、犬塚だったな。」

「ああそうだ。それにしても、あゝもう！！たまんねー！！おれ！！あの人好きになっちまった。もう一目見ただけでビビツつとくるものがあつたよ。もう最高！！たまらん！！あ！それからな！瀬戸！！黒木さんに惚れんなよ！俺だけの黒木さんなんだからな！！！！」

ビシイと音がする勢いでこちらに指を向けてきた。

犬塚は俺に言い終えると、黒木先輩の居る方を見て、惚けていた。

俺は喋りまくり、黒木先輩の方を見て、惚けている犬塚を見て呆れていた。

俺は一応、忠告だけする。

「はあゝ お前わかつてるのか？」

「？ どういうことだ？」

「お前先輩と付き合うつてことは黒木先輩のことが好きな人すべて敵に回すつて事だぞ……」

「は！そんなもん！！どーつて事ないさ！！なんたつて俺には愛があるからな！！」

犬塚はそう宣言すると黒木先輩を見つめて、また惚けていた。

俺はそれを見て、呆れてものも言えなかった。

呆れていると、隣にいた朝比奈さんが話しかけてきた。

「あなたは、確か、瀬戸さんでしたよね？」

「へえ……あ、はい」

突然話しかけられびっくりした俺。

「よろしく願います。私は………つて自己紹介はしましたね。ウフフ。ところで私まだ入ったばかりでお友達がいませんの………、よければお友達になっただけませんか？」

突然の申し出に俺はキョトンとする。すると何かを勘違いしたのか暗い顔になって言った。

「そうですね。私ではだめですよね……」

「いえ！！ 違いますよ。 ただいきなりだったんでビックリしてしまっただけですよ。 友達なんてこっちからお願いしますよー！！」

俺は朝比奈さんが喋っている途中でさえぎって話した。

朝比奈さんはビックリした顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「フッフ ありがとうございます。 でわ、これからよろしくお願いしますね」

朝比奈さんはスツと手を出してきた。俺はなんだろうと思ったがすぐに握手だとわかり俺も手を出して握手した。

「こっちこそ、これからよろしく」

しばらく朝比奈さんと話しているという朝比奈さんのことがわかった。

たとえば朝比奈財閥のご令嬢だとか、習い事でピアノと書道と護身術などを習っているとか、好きな食べ物はいちごとかキライな物は虫とか、色々と話してくれた。

そしてしばらく朝比奈さんと喋っていると、スピーカーから声が聞こえてきた。

FILE 4

しばらく朝比奈さんと喋っていると、スピーカーから声が聞こえてきた。

「よし！ 自己紹介などは終わったみたいだな！ ではこれから対面式を始める、だが皆にグループを作ってもらったのは、今からすることに必要だからだ。これからする事とは 宝探しゲーム！ だ！！」

1年は皆ポカーンという顔をしている。2、3年は皆喜んでいる。

「ではまずはルールから説明しようか。ルールは簡単だ、この高校の敷地内にあるものを隠している、それは何かはいえない、そしてそれは私たち生徒会もどこに隠したかは知らされていない、宝を隠したのは先生方だ。これを皆で探してもらう。それは見つけた人のグループのものだ。しかも、グループで挑戦してクリアできたらヒントを教えてもらうということも可能だ。しかしヒントはどこかはわからない。それからこの宝探しはかなり時間がかかるため、今日見つからない場合、次のイベントに持ち越しとなるので、気をつけるように」

ちなみに 前回の宝探しは、最近できたテーマパークのペアチケツトでフリーパス券、園内の飲食店で使える5千円券だ。あとほかにも温泉旅行とかもあったな。ただし、暴力などだましなどをして奪ったものは無効とする。そして、グループは固まって行動すること、もし、離れて探すとそれで見つけても無効だ！！」

それを聞いて俺は目を輝かせた！！。

「ウオオオ~~~~!!」

突然近くの誰かが叫んだ。確認すると犬塚だった。

「よし!! それがあれば、黒木さんを誘ってデートができる!!」

犬塚はそういつて興奮している。

「まあ、今回は何かは知らないが、皆がんばってくれ!!」

あと今9時30分だから昼時には各自食堂や購買などで昼飯を調達してくれ!

終了時刻は7時までとする! 帰らなくてはいけない場合はグループの人と先生に言ってから帰ることだ!」

「それでは一斉に入り口に行くと大変なので1グループごとに出てもらう、20秒でな まず1グループ行ってくれ! この後からは先生方の指示に従ってくれ」

黒木先輩が言うと1グループは動きはじめる。

「よし!! 俺たちもいける準備しておくか」

徳川先輩が俺たちに指示を出す。

黒木先輩が俺たちのとこにやってきた。

「よし!! がんばってお宝探すぞー!! いいか? ほかのグループには負けるなよ!! しかし暴力などはするな!! いくつかあるからできれば2つくらい見つけるんだ!」

黒木先輩が言っていると俺は気合を入れた

「オオオオオオ~~~~!!!!!!」

3分半後

「よし!! 行くぞ!!」

「はい!!」

10グループの皆が反応して動き出す。

黒木先輩は先頭に立って皆を連れて動き始める。

「まずは、中庭に向かうぞ!!」

俺たち10グループの皆は中庭に向かった。

FILE 5

俺たち10グループの皆は中庭に向かった。

聞くとところによると、この青龍高校の敷地は東京ドーム1つでは納まりきらない、東京ドーム、3、4個はいる敷地の広さだ。この高校は金持ちがたくさんいるのでそれのおかげとか何とか。

俺たちは中庭に到着する。ここの中庭は見渡す限り緑がある。一瞬ここはホントに学校か…….と思ってしまうくらいだ。

中庭に着くと、すぐに宝を探し始める。

俺たちのほかに、中庭にはかなりの人が居る。

俺たちは今、中庭で探している。木の根の部分や、草花の間や、噴水の中や、自販機の下や裏など隠せる場所を探す。

探し始めて10分後。

「は〜あ……ないな…….それにしても疲れるな…….」

俺がつぶやくと近くにいた朝比奈さんが寄ってくる。

「大丈夫ですか？」

「え、ああ、大丈夫だよ！」

「そうですか。それにしても見つかりませんね…….」

「うん まあ見つかりやすいとすぐ終わって2、3年とかと仲良くなれないからね。これは仲良くなるためのイベントみたいだからね。」

「確かにそうみたいです。仲良くなつて楽しく過ごす、ですよ？それでしたら、ほかの方にも聞いてみませんか？」

「そうだね ほかの人にも聞いてみよう」

俺たちは近くにいる人を探した。近くにいたのは天持先輩と小林先輩だった。

「あつちに、小林先輩たちがいるから、聞いてみよ」

俺たちは小林先輩と天持先輩に近寄ると声をかけた。

「小林先輩、天持先輩いいですか？」

「ふえ？……あ！えつと君は……瀬戸君だったけ？そちのが……朝比奈さんだね！」

天持先輩が俺たちの名前を当てた。

「あ、はい」

「フフフ そんな硬くなくてもいいわよ」

小林先輩が固くなっている俺に話しかける。俺はソプラノボイスで癒される。

「はい わかりました。」

「それから私のことは、美雨、と読んでくださいね。」

「じゃあ！！ 私は浅海ってよんでねー！！」

先輩方を名前で呼ぶことになったので俺も申し出る。

「じゃあ俺のことも、凌、って読んでください。」

俺が言うのと隣の朝比奈さんも

「私のことも名前で呼んでください、あと瀬戸君私のことは、桜、と読んでくださるとうれしいです。私も、凌、とお呼びしますので」

「うん。わかったよ。桜、美雨さん、浅海さん」

「ところで凌何か用だったの？」

「あ！はい、まだ始まったばかりだけど そっちはどうかな？と思
って見に来きたんです」

俺は浅海さんと美雨さんに用件を伝えると、

「こっちもまったくだめだよ。それに、時間はまだあるんだから、
のんびり探そうよ」 ね？」

「そうですよ。急がなくてもほかのグループもそう簡単に見つけられ
ませんよ」

「そうなの？」

俺は2人に聞いてみる。

「ええ 前回も見つかったのは何時間後でしたっけ？」

「うんとね 確か4時間か5時間だったと思うけど？ まあ1つ見つかるのにそれだけかかったけどね」

俺は啞然とした。1つで4、5時間って全部で見つけるなら何時間かかるんだよとおもったが口には出さない。美雨さんたちに言っても仕方ないからだ。

「大丈夫よ。だってこのグループには生徒会長がいるのよ。たしか前日も生徒会長のグループが1つ見つけてましたね」

「うんうん！！生徒会長のグループが見つけてたね！！だから今回は会長が私たちのグループにいるから大丈夫だよ！！」

俺は啞然とする。隣の桜もビックリした顔をしている。黒木先輩はいったいどんなにすごい人なんだろう？と思ってしまう。

そしていろいろ考えているとふと俺は前回どこに宝があったのか気になったので聞いてみると

「えーっと前回は、1つは校長室の先代の校長の額の中にあつたみたいだよ、ほかは………天井だったかな？えっとどこかの教室の天井の中だったとおもっけど………それから………体育館だよ」

俺は、どうしてそれが見つけれなかったのか気になった。そっという見つけやすいところは1番に探すと思ったからだ。

もしくは、みなが裏を搔いて逆に裏を搔かれたのかどちらかだ。

「へえー、じゃあ今回はまた同じところにあるかもね」

「いや〜ないでしょ〜」

「そうかな？裏を搔くなら同じ所に隠さない？」

「そうですね、そういう考えもありますね」

「会長に聞いてみるってのはどうでしょ？」

桜が言うと俺たちは黒木先輩を探した。

FILE 6

桜が言うと俺たちは黒木先輩を探した。

黒木先輩は周りに人がいないところにいた。

「あ！・・・いた！あそこだ！行こ！」

俺たちは黒木先輩に向かって歩き出した。

「会長」

と、浅海がよび

「黒木会長」

と、美雨が呼ぶ。

「うん？ 何か用？ 浅海に美雨・・・そっちの1年は確か瀬戸 凌君と・・・朝比奈 桜さんだね？」

「あ！はい」「そうです」

俺たちは同時に返事をする。

「何か用？無駄話なら移動中にしようね」

「いえ、無駄話じゃなくて、宝はここにはないんじゃないかって思
って・・・」

「へえ………どうしてそう思うの？」

黒木先輩は不思議そうな顔でしかし、笑みを浮かべ、俺に聞いてきた。

「ここは、体育館から一番近くて、それにここには生徒が多いので探すのはあきらめる方がいいと思うんですよ。それから、前回も先生方が隠したのなら裏を搔いて同じ場所にあると思います。それが体育館の中もしくは周囲です。」

「うむ、頭は悪くないようだね。だがここは広い、ゆえに探してない場所も多い、だからだ。ここを探して………そうだね。今10時前か………なら10時40分にここを出て体育館の方に行くよ。」

「はい!!」

「10グループの人、集合」

黒木先輩が皆に声をかけると、みんな、集まってくる。

「慶 どうした？」 「？ 会長どうしました？」 「会長、どうかしましたか？」

徳川先輩、上杉先輩、椎名先輩が黒木先輩に集めた理由を聞いている。

「まあ………待ちな！今から話してやるからさ、その前に周りに聞こえないように、もっと近づくんだよ」

みんなが近づいて円を組む。

黒木先輩は小さな声で話し始める。

「よし！！それじゃあ、集まってもらった理由はね、この1年の瀬戸君のおもしろい意見だ、まあこの瀬戸君の意見じゃここにはないって話だ、どこにあるのかってのは、前回のあった場所にあるってことらしい。」

だから後40分くらいしたらここから動くよ。

行く場所は、体育館だ！！だがほかの生徒には気づかれないように、気をつけて移動するよ。」

みんなが驚いてる。代表で徳川先輩が聞いてくる。

「瀬戸君だったね？ 君はどうして体育館にあると思うんだ？」

「それは 簡単ですよ。だって体育館は僕たち生徒全員が出てきた場所だから 一番怪しまれにくいからですよ。体育館はみんな集まっているから隠すにも見つかってしまうリスクがありますからうまく具合に隠さないとだめですからね。しかしリスクを犯してまでも隠す価値はあります。皆出て行きますから体育館からは、だから戻ってくる人は少ないはずですよ。」

俺が説明すると皆まだ少し納得いかないような顔をしていたが、黒木先輩が賛成しているためなのか、反対するものはいなかった。

「って言うことだから、時間になり次第ここを動きます、でもほかの生徒には気づかれないようにね。それじゃ解散！」

黒木先輩の一言で俺たちは離れていった。そして宝探しを再開した。
再開して少ししたら近くに冬月さんが近くに来ていた。

「やつほ〜、瀬戸君、私は冬月だよ〜!!」

「冬月さん、何か用？」

「まあね〜、さっきの瀬戸君カッコ良かったよ〜!!」

俺はその一言に照れる……………

「い、いや、そんなことないよ／＼／＼」

「そんな照れるな〜!」

「／＼／＼／＼／＼／＼照れてないよ!!」

「まつ!!いいけど〜!!」

「それより、用はそれだけ?ないなら探すの手伝ってよ」

「えつと〜、用はね!!何だっけ？」

「いや…………俺に聞かれても知らないよ……………」

「え〜つと…………思い出せないから…………まつ!!いいや!
思い出したら言っからね〜!!」

「う、うん、じゃあ探そ!!」

「は~~~~い!!!!」

俺たちは話を終わって宝を探し始めた。

30分後、俺たちは徐々に体育館の方に移動していた。

「よし!!じゃあ体育館の方に行くよ」

黒木先輩が小声で皆に確認をする。それと同時に俺たちは動き始める。

FILE 7

それと同時に俺たちは動き始める。

俺たち1年は、先輩たちの後ろについて行ってる。

10分後、俺たちは体育館前にいていた。

周りに人影はまったくない。俺たちはすぐに体育館の中に入った。

体育館の広さは東京ドーム0.8つ分くらいだ。ゆえに3学年集まっても余裕がある。

「よし!! これから体育館の中を搜索するよ。そうだ、ここでもバラバラになると棄権ってことになるから、気をつけて固まって動くこと。それじゃあ、搜索開始!!」

「ハイ!!」「はい!!」「ハイ」

俺たちは返事をするに散らばった、しかし、離れすぎないで。

まず、俺は、隠せる場所を探す。ステージの下、体育倉庫、放送室、壁際の窓のカーテン、2階にある窓のカーテン、ステージ前の階段の中、ステージの垂れ幕、バレーボールの棒立ての穴、ステージ脇のドアを入った中の天井近く。etc・・・

これだけ隠す場所はある。

俺はその中で入り口から近い体育倉庫に向かう。

「うん、ここの体育館にあると思うんだけどな……
うん？こは……暗いな、まあ、扉あけてやるか……
……よつこいしょ！！ えつと、ここで隠せそうなのは、マット
と跳び箱だな。よし探すか」

俺は探し始める、まずマットからだ……。俺はマットを一枚一枚見て探している

「うん？・・・なんだこれ？えーっとなになに？【これは、
【どこでも使える1万円券 です】この紙を最後に担当の先生に渡
してください、渡すことにより、景品と交換いたします】なに！！
！！！！！！」

俺は、はじめビックリしていたが、すぐに皆を呼ぶ。

「みなさん！！！！！！ちよつと来てください！！！！！！ありまし
た！！！！！！宝です！！！！！！」

「え!？」 「何!？」 「マジか!？」 「よくやった瀬戸!!!」

「ナイスです、凌!!!」

みんながそれぞれ返事をし、皆が俺の近くに集まる。

「みてください!!　これです!!」

【どこでも使える1万円券】

「みたいです!!!!」

「どれよく見せてみる。」

そう言つて徳川先輩が俺から受け取った。

「ほう！………確かに、宝みたいだぞ……でかしたぞ
……！……瀬戸」

「見せて見せて……！」「俺も」「私も見せて」

みんなが徳川先輩の持っている紙に群がる。

「よし 幸先いい調子だ……！このままの調子で行くぞ……！」

黒木先輩が言つと放送が鳴った。

ピンポンパンポン

『え………宝が1つ見つかりました。見つけたのは10グル
ープの瀬戸 凌君です。後残りは………です。がんば
って見つけましょう。』

放送は、見つけると放送されるようになっていくようだ。

「でわ、このまま体育館の探索を続行する、しかし離れすぎないよ
うに気をつけること……！」

「ハイ……！」

黒木先輩が指示を出すと俺たちは返事をする。俺たちは宝を見つけ
たおかげで士気が高い。

俺たちは探索を再び開始する。

俺は今度も体育倉庫に向かう。そこで跳び箱を調べるが特に怪しいものはない。ほかを見て回るが特に見当たらない。

俺は体育倉庫をあきらめて今度は壁際の窓のカーテンを調べる。しかし、ここにも何も見当たらない。

俺は、次の場所に向かう。俺が向かったのは、ステージ脇のドアだ。俺はドアを開けて中の天井を見る。紙が張ってあった。しかし、それには、ヒント、と書かれていた。

俺はその紙を取ると中を見る、そこにはなぞなぞが、書かれていた。

【
なぞなぞ

1 番 家にあるもので、つい二オイを嗅いでしまうものは何？

2 番 イカダの上に乗っている生き物は？

3 番 段差でつまずく人は？

4 番 お城の色は何色？

5 番 あたつてもいたくない。ぎやくにうれしいものは？

答えから頭文字を1文字ずつ取り言葉を完成させなさい *ただし、1つだけ頭文字を2文字使うものがあります】

俺はこれを見つけたのでまたみんなを呼んだ。

「みんな~~~~ ヒントがあつたよー」

「わかった。今行く。」

そういつて皆が集まってきた。

「これです。えっと、ヒントはなぞなぞみたいです。」

「なぞなぞ、ですか？」

石川が尋ねる。

「うん、なぞなぞ 問題はこれなんですよ。」

「じゃあ、これどれでもいいからわかる人いるかい？」

徳川先輩が皆に尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

みんなが黙って考え始めている。

俺も考え始める

「はい、私、わかる」

1人の人が手を上げる

FILE 8

1人の人が手を上げる

それは、椎名先輩だった。

「私、わかるのある」

椎名先輩が言っと、

「えっとどれがわかるのかな？」

徳川先輩が尋ねる。

「2番、3番、わかる」

「えっとじゃあ答えは？」

「2番、イカ、3番、ダンサー」

椎名先輩が答えを言う。

しばらく、考えていると、徳川先輩が

「ふむ、2番はイカダの上に乗っている生き物は？、だからイカか・
・イカダ↓いかだ↓イカだ、になるから イカ か・・・
3番は、段差でつまづく人は？だから、ダンサーか・・・段差↓だ
んさ↓ダンサ↓ダンサー、か・・・駄洒落だな」

と答える

徳川先輩が椎名先輩の答えからなぜそうなるのかをみんなに教える
と、みんなそれで納得がいったという顔をしていた。

「じゃあ頭文字だから イ と、ダ だな」

「私もわかったものがあつたわ」

黒木先輩が何か思いついたような顔でわかったことを言う。

「1番と4番だ 1番は嗅ぐ↓かぐ↓家具 になって、4番はお城
↓城↓しろ↓白 になるわ。」

「そうか……。確かにそうだな。となると後は5番だけだ 今の
頭文字は、か、い、だ、し、。 だな、つなげると かいだし。
だな。 あ！けどどれか1つは2文字だったな。

となると、 かぐいだし。、か、かいかだし。、か、かいだんし。
だな

一番しつくり来るのは最後だな。」

俺は徳川先輩の言葉を聞いてひらめく。

「あ！」

みんながビックリしてこっちを見ている。

「わかりました。ただ隠されている場所がわかったただけですが。
隠されている場所は、……………」

俺はステージがある方向かった。

「ここです。ステージ前にあるこの階段です。多分答えは、階段下です。かいだんし。つてので最後が た です。」

俺が答えを言うと皆納得したような顔をしていた。

「みなさん。だから、ここを探しましょう。階段を動かしたりしないためなので気を付けてください」

俺は皆に言うと1人階段を動かして探し始めると、みんなも動いて階段を動かして探し始める。

しばらくみんなで探していると、織田先輩から声があがった。

「みんな、こっちに紙があつたぞ!!」

俺たちは織田先輩の周りに集まった。

「見せて」

黒木先輩が織田先輩から紙を受け取る。

「開くわよ」

黒木先輩がゆつくりと紙を開ける。

開けると、そこには

【これは ラグナロクロランドのフリーパスチケット、ラグナロクラ

ンド園内で使う5千円券
です。」

そこには、そう書かれていた。

「へえー、いいものじゃない」

「これは、めちゃくちゃいいやつだよ このフリーパスは確か4
万くらいじゃなかったか？ 1日じゃなくて2、3日だったよな」

徳川先輩がラグナロクランドのフリーパスの値段を言った、あとに、

ピンポンパンポーン

『えー 開始から約1時間半で2つ目が発見されました。 発見し
たのは10グループ 10グループの 織田 慎君 です。 残り
の宝は、……………です。 皆さんがんばってください。』

「これで私たちは2つ見つけたが、まだ見つけれ可能性があるか
ら探すよ。だから まだ油断はしたらだめだ、これで私たちは、宝
をもっと見つけにくくなった」

黒木先輩が断言する。

「えー！ どうしてです？」

俺は不思議に思い、黒木先輩に尋ねる。

「それは、私たちが2つ見つけたことによつて宝が減っているだろ
？ それにより、ほかの人たちは、より必死になって探すから、す
ぐにほかのグループが見つけてしまうからだ。そういつてるそばか

ら、ほら」

ピンポンパンポー『えー、開始約1時間50分で3つ目の宝が発見されました。』

発見したのは、20グループ、20グループのティファニア・クリステルさんです。残りの宝は残りわずかです。みなさんがんばってください。』

俺たちが見つけて20分くらいで次の宝が見つかった。

俺はビックリしている。ほかの1年の人は皆驚いてる。

「ここの人たちはすごい人ばかりなんですネ……………」

俺は石川の言葉に心の中で同意した。

だが、そうと決まれば、探索再開だ。

「先輩！！早く次の宝を探しましょう！！」

俺が黒木先輩に言うと黒木先輩はうなずいて

「よし、みんな、私たちも次の場所に移動してまた見つけるよ。」

「はい！！！！」「はい」「うん」「ですわね」「わかった」

みんなが返事をする、俺たちは立ち上がり、移動をはじめ。

「俺たちは、次に向かうのは、校長室がある職員棟だぞ。」

徳川先輩がみんなに向かう場所を教える。

俺たちは体育館からでて職員棟に向かい始める。

FILE 9

俺たちは、体育館からでて、職員棟に向かい始める。

青龍高校の職員棟は体育館から遠かった。

体育館から歩いて7、8分、かかる距離に職員棟はある。

俺たちはその間、皆で喋っていた。

「黒木先輩」

俺は黒木先輩に話しかける。

「うん？瀬戸なんだ？」

「あの先輩ってどうして生徒会長になろうと思ったんですか？」

「あー！それは俺も気になるっす。」

犬塚が話に入ってくる。

「私も気になりますわ。」

「私たちもー！」

桜と浅海さんと美雨さん、も入ってくる。

「うーん 別にこれといって、特別な意味はないな、ただもつと学校を楽しく過ごしたいから、生徒会長になっただけだな」

「そうそう、こいつ1年のころなんて面白くない〜ってずっと唸っててうるさかったよ、
けど何かイベントがあると、もうテンション高くて困ったよ。しかも、毎回1人で張り切って、それで、皆と一緒に盛り上がるうとしてたな」

徳川先輩が笑いながら言うと、

「ちょー！ ちょっと！なにいつてるんだ！！そんなこと言わなくてもいいだろうー！！」

黒木先輩は顔を真っ赤にして徳川先輩に文句を言っている。

「へえー」

みんな黒木先輩が顔を真っ赤にして文句を言っているのを笑っていた。

俺は、というと………《黒木先輩、怒るってより照れてるな………かわいすぎる………》

俺は、そう思っていて、急に何か恥ずかしくなったので顔を回りに向けると、

隣で犬塚が惚けていた。その隣にはこっちをじっと桜が見ていた。俺は恥ずかしくなって、すぐに目をそらし、黒木先輩に向いた。

「けど、黒木先輩。学校が楽しくなるようにってのもすごい理由だと思いますよ。」

俺じゃ生徒会長になってまで、学校を楽しくしたいなんて思わない

ですもん。

だから黒木先輩の理由は、すごい理由だと思いますよ。」

「え！　そうか・・・・・・・・・・・・・ありがとう」

黒木先輩の真っ赤な顔がもどり笑顔でお礼を言ってくる。

俺はその笑顔に見とれていた。

黒木先輩は、俺が黙ったことを、不思議に思ったのか、訊ねる。

「？　どうした？　瀬戸」

「！！　い、いえ！！　なんでもありません！！」

俺は答えたが少し声が裏返っていた。

「？　まあいいわ、それよりもうすぐ着くわよ」

「は、はい！！」

俺たちは、そんな話をしている間に、職員棟まで来ていた。

俺たちは、棟の中に入ると、真っ先に校長室に向かう。

「失礼します」

黒木先輩がドアをノックし挨拶をする。それに習って俺たちも挨拶をする。

「しつれーしまーす」「失礼します」「失礼しまーす」「失礼する」

俺たちも、黒木先輩に習い、挨拶をする。
すると、

「どうぞ」

中から返答があつた。

黒木先輩は、ドアを開けて中に入る。

俺たちも、黒木先輩の後に続いて、校長室に入った。

校長室には、校長先生がいた。

「校長先生、すこし、失礼します」

「はい、どうぞ、だけれど、私の机とその金庫は触ってはだめですよ」

「はい、わかりました」

俺たちは校長室で紙を探し始める。

「じゃあ、啓介、浅海、美雨、それから2年の椎名さん、と上杉君、1年の、犬塚君、冬月さん、隣の部屋の応接間をお願い、私と残りの人はこの校長室を探します。それじゃ、始めて」

俺たちは、黒木先輩の指示の元、分かれて探し始める。
徳川先輩たちは、隣の部屋に移動し始める。

「それじゃあ、私たちも始めますが、そうね、私は校長先生近くを探すわ。だからほかはお願いね」

「はい」

俺たちは返事をする。そして探し始める。

俺は前回あったという、先代の校長たちの写真に向かう。

「まずは、額だな」

ガタガタ・・・取れた、俺は額を一枚一枚丁寧に扱い額の裏を開ける。そこには・・・・・・何も入っていないかった。

俺が、額と格闘していると時間は10分経過していた。

そのころ、校長室にいる黒木先輩やほかの人たちは、まだ探していた。

「みんな、そっちはどうですか？」

みんなに尋ねると、

「こっちは、だめですわ」と桜

「こっちもだめだ」と黒木先輩

「ここにもありません」と俺

「こっちにはない」と武田先輩

「こっちはありません」と岡本先輩

「こっち、ありません」と石川

ほかのところもないようだ。

「ないか、じゃあ、隣にも聞いてみようか」

黒木先輩がまとめる。

FILE 9（後書き）

誤字脱字、感想などありましたら、ご連絡ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5404g/>

学園生活

2010年10月11日13時52分発行